

# ラーマヤナ

R A M A Y A N A

『ラーマヤナ』はサンスクリット語の全七編、

二万四千ほどの詩句(シュローカ)より成る

古インドの国民的大叙事詩です。作者は「最初の詩人」と呼ばれる聖ヴァールミーキで、この叙事詩によってヴィシュヌ神の化身である正義の王子ラーマは英雄として崇拝を受けるようになりました。

また、ラーマの妻のシーターは貞婦の鑑として、弟のラクシュマナは孝順の範として、

猿の勇士ハヌマーンは忠節の権化として敬愛されるようになりました。

『ラーマヤナ』の物語は、まずラーマの二人の息子による吟唱によって口伝され、

その後、インド文化の国外への広がりと共にアジア諸国に伝えられて、

舞踏や演劇に作り変えられたり、絵画や影絵芝居の主題になったりしました。

日本へは叙事詩中の説話のいくつかが『六度集経』『雑宝蔵経』などを通して伝えられ、

平安朝の『宝物集』に収められています。

## 第1巻 少年編

アヨーディヤーを都とするコーサラ国のダシャラタ王には後継者がいなかったため、王は王子の誕生を願ってプットラカメーシティ・ヤグニヤ(男児を授かるための供儀)を行った。そのころ、天上の神々の世界はラクシャサ(羅刹)と呼ばれる悪魔の王ラーヴァナの横暴に悩まされており、神々が相談した結果、ヴィシュヌ神がダシャラタ王の王子として生まれ、ラーヴァナを滅ぼすことになった。

やがて、ダシャラタ王の三人の王妃に四人の子どもが生まれた。最年長のカウサリヤー妃からはラーマが、一番年若いカイケーイー妃からはバラタが、真ん中のスミトラ妃からはラクシュマナとシャトルグナの双生児が生まれた。四人の中でも長男のラーマは特に文武両道に優れ、十四歳に

して聖仙ヴィシュワミトラのヤグニヤ(供儀)を警護するため、弟のラクシュマナと共に聖仙に随行し、羅刹らによるヤグニヤの妨害を阻止した。ヤグニヤが無事に完了すると、ラーマはヴィシュワミトラの勧めによりヴィデーハ国王ジャナカの娘、シーターの婿選びの会に出席する。ラーマはそれまで誰も持ち上げることのできなかったシヴァの弓を軽々と持ち上げ、真二つに折ってしまった。ラーマはシーターを勝ち取り、ラーマの弟たちはシーターの妹や従姉妹たちを妻とした。



## 第2巻 アヨーディヤー編

その後、ラーマとラクシュマナは12年間父王を助けて統治したが、自らの老いに気づいたダシャラタ王はラーマを王位後継者に決めた。しかし即位式の前夜、侍女のマンタラーにそそのかされた



カイケーイー妃は、ラーマを14年間森の中に追放し、自分の生んだ息子バラタを王位後継者とするようダシャラタ王に迫った。王はかつてカイケーイー妃に二つの願いをかなえることを約束していたため、この申し出を認めざるを得なかった。父の約束を知ったラーマは、この願いを快く受け入れ、弟のラクシュマナと妻のシーターを連れて自分からアヨーディヤーの都を出て行った。ダシャラタ王は悲しみのあまり世を去り、バラタはラーマを追いかけてアヨーディヤーに戻って王位に就くよう懇願したが、ラーマはそれを聞き入れなかった。バラタは王座にラーマの履物を置いて、ラーマの不在期間は代理として国の政治をとることになった。

## 第3巻 森林編

追放されたラーマたちがダンダカの森に住んでいたとき、魔王ラーヴァナの妹であるシュールバナカーがラーマに言い寄って拒否され、ラクシュマナに耳と鼻を切り落とされた。怒ったシュールバナカーは兄のラーヴァナを扇動し、ラーヴァナは部下のマーリーチャを美しい金色の鹿に変えて、ラーマとラクシュマナが鹿を追いかけている間にシーターを誘拐した。空の上でラーヴァナに遭遇した禿鷹のジャターユは、シーターが連れ去られるのを阻止しようと勇ましく戦ったが、そのため致命傷を負った。シーターはランカー（セイロン島）に連れ去られ、ラーヴァナの妻になるよう説得されるが、断固としてそれを拒み、アショーカ園に監禁されてしまう。ラーマは妻が誘拐されたことを瀕死のジャターユから聞き出し、ジャターユはラーマの膝の上で息を引き取った。



## 第4巻 キシュキンダー（猿の王国）編

シーターを救出する旅に出たラーマとラクシュマナは、聖者マタンガの庵で信心深い老女シャバリーに出会った。長い年月ラーマの到着を待ちわびていたシャバリーは喜んで二人をもてなし、ラーマの



御足のもとで肉体を去った。シャバリーの遺言により猿王スグリーヴァに会ったラーマは、スグリーヴァが兄のヴァーリに王国と妻を奪われたのを知って友好関係を結び、キシュキンダーのヴァーリを攻め滅ぼした。スグリーヴァは王位に復帰させてもらったお礼に、シーター奪還に全力を尽くすとラーマに約束した。スグリーヴァの命によって勇敢な猿のハヌマーンがシーターを捜索し、その所在を突き止めた。

## 第5巻 スンダラ(華美)編

ラーマと猿軍は海岸に着いたが、海を隔てたランカーに渡ることは困難であった。しかし、風神の子としての能力を持つハヌマーンは単身空中を飛んでランカーに渡り、ラーヴァナの宮殿をつぶさに調べ上げ、アショーカ園にいるシーターを発見した。ハヌマーンはラーマの使者であることを証明するため自分の胸を裂いて開き、心の中に祀られているラーマを見せてラーマが救援に来る日が近いことをシーターに告げた。しかし、ラーヴァナの長男に捕まってしまう、尻尾に火をつけられる。ハヌマーンは燃える尻尾で屋敷から屋敷へと飛び跳ねてランカーを炎上させ、大きな被害をもたらした後、ラーマにシーターの居所を伝えるため、海を飛び越えて帰還した。



## 第6巻 戦闘編



ヴィビーシャナ(ラーヴァナの弟)は兄ラーヴァナの不正を非難し、シーターをラーマの元に返すよう何度も助言したが、ラーヴァナは耳を傾けなかった。ヴィビーシャナはラーヴァナを捨ててラーマの軍隊に加わった。海神の力を借りて猿たちによって架けられた橋を渡り、ラーマがランカーに攻め込んでラーヴァナ軍とのすさまじい戦闘が始まった。決戦は七日七晩続き、遂にラーマはラーヴァナの首を刎ねてシーターを救出した。しかしシーターは身の潔白を疑われ、燃え盛る薪の炎の中に身を投じた。火の神アグニが現れ、シーターの身が潔白であることを証明した後、ラーマはシーターを連れてアヨーディヤーの都に帰還した。

## 第7巻 終末編

王位に就いたラーマは高德の誉れ高く、よく国を治めたが、国民の間にはまだシーターの身の潔白を疑う声のあることを知り、弟のラクシュマナにシーターを森の中に棄てさせた。悲嘆に暮れたシーターはヴァールミーキ仙の草庵でラヴァとクシャの双生児を産んだ。ヴァールミーキ仙はシーターが純潔であり、ラヴァとクシャはラーマの本当の子であると証明したが、ラーマは満足せず、シーターは身の清浄を証明してくれるよう地母神に祈った。するとたちまち母なる地神が現れ、王座に座ったままシーターを抱いて地中に消えた。ラーマは嘆き悲しんだが、やがてラヴァとクシャに王位を譲って天上に昇り、天上で再び元のヴィシュヌ神にもどった。

